

1. 理事長あいさつ

本年9月に開催しました第5回日本放射線看護学会学術集会には、全国各地から450名近い看護職のみなさまにお集まりいただき盛会裏の中、無事終了することができました。集まっていた方の方の多くが、臨床現場で活躍しておられる看護職のみなさまで、教育機関の関係者が少なかったのは、教育機関に身を置くものとしてはちょっとさみしい思いがしました。

医療職にとっては、放射線は極めて日常なものであり、看護職は、正しい知識を持ち、放射線としっかり向き合っていくことが必要であることを今回の学術集会で少しでも感じ取っていただければ幸甚です。今や、義務教育の中にも放射線教育が取り入れられている時代です。次回のカリキュラム改正では、必ず「放射線教育」に関する教育内容を取り入れていただくよう関係部署に根気よく働きかけてまいります。

今回の各術集会では、日本保健物理学会、日本放射線技術学会からもご協力いただきました。日本放射線技術学会とは、具体的な今後の連携について話を進めさせていただいています。

2. 理事会からのお知らせ

○学会員数

日本放射線看護学会は、平成28年8月31日時点で会員数512名となりました。放射線看護の発展のために今後とも会員増へのご協力をよろしくお願いいたします。

○総会報告

平成28年度日本放射線看護学会総会は下記の通り、第5回学術集会会期中に開催・終了しました。参加会員は44名でした。

日時：平成28年9月4日（日）9：00～9：50

場所：東京医療保健大学国立病院機構キャンパス 東が丘・立川看護学部本館206

《主な議事》

- ・ 平成27年度事業報告、平成27年度決算報告、監査報告、平成28年度事業案、平成28年度予算案について報告され、すべてについて異議なく承認されました。
- ・ 理事長より平成29年度総会で定款案の承認を得て10月から一般社団法人としてスタートさせたいこと、そのため法人化準備委員会を立ち上げ1年かけて法人化準備を行うスケジュールについて説明されました。
- ・ 第7回日本放射線看護学会学術集会は、長崎大学（浦田秀子教授）を会長とすることが報告されました。
- ・ 第6回日本放射線看護学会学術集会会長（名古屋大学 太田勝正教授）より次回学術集会について紹介、挨拶がありました。

○法人化準備について

総会の承認を受け、法人化を進めていくために法人化委員会が組織されました。

法人化委員会のメンバーは以下の通りです。

委員長 草間 朋子（東京医療保健大学）

副委員長 小西 恵美子（鹿児島大学医学部 客員研究員）

委員 桜井 礼子（東京医療保健大学）

委員 小山 珠美（東京医療保健大学）

平成29年度の総会に向け、一般社団法人の定款等の準備を進めます。

3. 各委員会からのお知らせ

○学術推進委員会

学術推進委員会は日本放射線看護学会の学術推進を目的とし、関連学会及び団体との連携強化に関する活動や学会および学術集会の活性化・学術推進活動を行っております。

平成28年度の委員メンバーとその活動について紹介いたします。

【委員紹介】

委員長：西沢 義子（弘前大学大学院保健学研究科）

委員：野戸 結花（弘前大学大学院保健学研究科）

青木 和恵（静岡県立静岡がんセンター）

太田 勝正（名古屋大学大学院医学系研究科）

作田 裕美（大阪市立大学大学院看護学研究科）

大森 純子（東北大学大学院医学系研究科）

【活動内容】

第5回日本放射線看護学会学術集会にて、学術推進委員会企画として交流集会を開催致しました。詳細はニュースレター第2号「活動報告」をご参照ください。

日時：平成28年9月4日（日）14：00～14：50

テーマ：放射線看護分野における看護職の活動と将来展望

発表者：吉田浩二氏（長崎大学医歯薬学総合研究科保健学専攻）

武田沙江加氏（環境省総合環境政策局環境保健部放射線健康管理担当参事官室）

堤弥生氏（国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構放射線医学総合研究所病院）

また、今年度は会員向けに「教育・研究活動推進のための情報提供」についても検討することに致しました。学術推進委員会に対する要望事項等がございましたら、下記までご連絡願います。

連絡先：日本放射線看護学会事務局 木崎 直美 e-mail:kizaki-bunken.co.jp

○編集委員会

【活動報告】

平成28年9月3日に開催された第1回編集委員会において査読委員の内規および電子ジャーナルサイト Medical Online, J-STAGE 掲載について協議し、申請作業が進んでいる。また、平成28年10月8日に開催された第2回編集委員会において投稿論文の担当委員および査読者を決定した。現在、第5巻学会誌については査読期間中である。

編集委員会からのお知らせ【重要】

これまで、日本放射線看護学会機関誌に掲載されました論稿を、電子ジャーナルサイト上で提供することになりました。つきましてはこれまでに本機関誌に掲載されました論稿の執筆者の先生方には、ご論稿の提供についてご了解をお願いしております。もしご了承いただけない場合には、11月30日までに編集事務局(journal@rnsj.jp)までご連絡ください。期日までにご連絡がない場合には、ご了解いただいたものとして取り扱わせていただきます。何卒よろしくようお願い申し上げます。

<お知らせ>

- ・第5巻の学会誌を平成29年3月にオンラインにて公開予定です。(現在、編集作業中)
- ・第6巻の学会誌発刊に向けて、平成29年7月より投稿受付を開始致します。

【重要】

これまで、日本放射線看護学会機関誌に掲載されました論稿を、電子ジャーナルサイト上で提供することになりました。つきましてはこれまでに本機関誌に掲載されました論稿の執筆者の先生方には、ご論稿の提供についてご了解をお願いしております。もしご了承いただけない場合には、11月30日までに編集事務局(journal@rnsj.jp)までご連絡ください。期日までにご連絡がない場合には、ご了解いただいたものとして取り扱わせていただきます。何卒よろしくようお願い申し上げます。

○広報・渉外委員会

<活動報告>

広報・渉外委員会は、会員ならびに広く社会に対して本学会の活動について周知することを目的に活動いたします。具体的な活動としては、本学会の広報のための広報誌（ニュースレター）の編集および発行、ホームページの管理等を行います。また、放射線看護に関連する分野で活動する方々との交流をすすめていきます。

【広報・渉外委員会】

委員長 太田勝正（名古屋大学）
副委員長 桜井礼子（東京医療保健大学）
委員 小山珠美（東京医療保健大学）

【平成28年度の活動予定】

1. 学会ホームページの管理・更新

今年度は、学会HPのリニューアルを行う予定です。現在、HPの作成のための活動を行っております。会員の皆様に、研修会等のお知らせを分かりやすくタイムリーにお知らせできるようにHPの工夫をしていきたいと考えております。

また、国際交流委員会と協力して、英語版のホームページの充実もはかっています。

2. 広報誌（ニュースレター）の発刊

広報誌は、会員の「放射線看護」の理解と実践力向上に資するためのもので、会員に対する理解及び協力を求めるため周知する必要がある事項をお伝えするものです。

学会の年間の活動を会員の皆様にお伝えするとともに、会員の皆様からの情報発信もしていただけるようにしたいと考えております。

3. 正会員および賛助会員の募集

日本放射線看護学会のリーフレットを作成し関連機関への配布を行ったり、ホームページの内容を充実して学会の活動に関心をもってもらい、会員を増やしていきたいと思っております。

4. 関連機関への渉外活動

放射線診療、放射線防護等に関連する学会等との連携を図るための渉外活動を行ってまいります。第5回各術集会では、日本放射線技術学会、日本保物理学会との共催でシンポジウムを開催し連携を図っております。第6回学術集会でも、この2学会との共催を図ります。

○国際交流委員会

<活動報告>

国際交流委員会は、本学会に重要と思われる国際・国内動向を把握し、学会員に情報提供することを活動の1つとしています。以下、我々が直接参加して情報収集した2件について報告します。

1. 女性放射線業務従事者の妊娠期間中の線量管理に関する日本保健物理学会の検討状況

医療機関には女性の放射線作業者が多いことから、2016年6月6日の同学会の標準化専門部会に、小西がオブザーバー参加しました(場所: 新橋寺田ビル)。

1) 会議の概要(以下、箇条書き)

- ・妊娠中の放射線作業者の線量限度については、胎児の被ばく線量を一般公衆の限度と同じ1mSv/年以下にするために、妊娠の申告から出産までの期間の腹部表面の等価線量が2mSv、内部被ばくは実効線量で1mSv以下と定められている。
- ・その後、ICRPは2007年勧告で次のように述べた(Publ. 103)：①妊娠女性の線量管理の対象は胎児の線量である、②妊娠申告から出産までの期間は胎児の線量が1mSvを超えないように管理する、③雇用主は妊娠女性の被ばく条件を注意深く調べる必要がある、④妊娠女性は高線量下の緊急時対応に従事すべきでない。
- ・母体による遮へいは余り期待できず、母体内の胎児線量は、母親腹部に装着した個人線量計で評価した母体の実効線量と同じとみなすことができるとの国内研究報告を考慮し、母体の実効線量を管理対象とすることで、安全側でかつ容易に線量管理が実施できる。
- ・以上に基づき、母体の実効線量が1mSvを超えないことを確実にするために、以下の4つの線量管理方法を学会に提案する。

① 社内規定等に手順を定めるなどにより、妊娠の事実を申告する制度を構築する

② 次について、女性放射線作業員への教育を行う：就業前および定常的に年1回程度

妊娠の申告の重要性

女性の線量限度、胎児の線量制限

各事業所の妊娠申告制度の具体的内容

胎児に対する放射線影響

③ 妊娠女性の放射線下作業条件の見直し：定常的で画一的な作業等により、偶発的に高被ばく線量を受ける可能性が少ないような作業につかせる。ただし、妊娠女性には放射線作業を禁止するなどすべきでない。

④ 以下による追加的な線量管理を行う

外部被ばく管理における補助限度の設定

被ばく線量の測定-アラームつき線量計等を活用して管理区域立入り事に線量管理を行う

等、きめ細かな管理

内部被ばく線量管理

2. 感想

- ・将来、妊娠女性の線量限度は腹部表面2mSvから1mSvに下げられる可能性がうかがわれた。
- ・妊娠に気付く前は男性と同等の限度でよい、ということから、現行の国内法をどうするかが問

題になると思われる。

- ・女性放射線作業（従事）者が多い医療機関では、上記の委員会提案の線量管理方法をきちんと実施していくことが今後の課題となろう。
- ・同学会での検討はまだ続くので、今後の推移を注視していく必要がある。

2. 「低線量放射線の健康影響に関する国内関連学会における研究の現状とこれからの連携のあり方」に関するパネルディスカッション

第53回アイソトープ・放射線研究発表会（2016年7月6日～8日）において、表記パネルがあり、小西が参加しました（場所：東京大学弥生講堂）。

2.1. 登壇者（敬称略）

座長：佐々木康人

パネラー：松田尚樹（放射線安全管理学会）、甲斐倫明（保健物理学会）、福本学（放射線影響学会）、今岡達彦（癌学会）、高橋千太郎（原子力学会保健物理・環境科学部会）

2.2. 概要

5学会から、学会の沿革、及び「3.11」以降の取りくみの紹介の後、フロアとの意見交換が行われました。以下、主な点を箇条書きします。

- ・健康・防護・安全に関する5学会間のリスク概念の理解のために、専門家間のコンセンサスの構築が必要である。
- ・5学会間の連携・相互乗り入れは重要であるが、これについては科学と対社会の2つに分けて考えたい。科学の点での学会間連携は難しいだろう。しかし、対社会の視点でのコンセンサスづくりは学会としての社会的責任であり、5学会は連携できる、すべきである。
- ・1つの英文ジャーナルを複数学会で共有する、福島の問題について学会連携で助成をとり議論のプラットフォームづくりをする、国内学会のコンセンサスとして教科書的なものを発信する、などの連携も考えられるのではないか。

2.2. 感想

- ・3.11を機に、学会連携が模索されていることがわかり、本学会として、今後、看護の他学会、あるいは看護以外の学会との連携・協働を考えていく上で参考になった。

4. 学術集会について

○第5回日本放射線看護学会学術集会報告

第5回日本放射線看護学会学術集会は、草間 朋子学術集会長のもと、「放射線と向きあう看護」をメインテーマとし、平成28年9月3日（土）、9月4日（日）の2日間、東京医療保健大学国立病院機構キャンパス（国立病院機構講堂および東京医療保健大学本館等）にて開催をいたしました。2日間ともお天気に恵まれ、参加者は約450名にのぼり、会員の皆様はもとより、会員外の方々にも多く参加をいただきました。発表の演題数は、口演28題、示説27題でした。

1日目は開会式に続き、会長講演「放射線看護学の確立をめざして」、伴信彦先生による特別講演「放射線防護と看護の接点」がありました。また今回はじめての企画として、日本放射線技術学会、日本保健物理学会との共催で、午後シンポジウムを開催いたしました。テーマは「放射線看護の確立に向けた学際的なコラボレーションのあり方」とし、5名のシンポジストの方々にご登壇いただき、様々な立場から放射線看護の方向性や共同のあり方について意見が交わされました。今後も、この2学会とは学会同士の連携ができるようにと考えております。1日目の最後は、ワンコインパーティを開催いたしました。たくさんの方々にご参加いただき、楽しく語らい、また情報交換の場となったと感じました。

2日目は、教育講演として、祖父江 友孝先生には「発がんリスクと予防対策」、萬 篤憲先生には「放射線治療入門～知っておきたい基礎知識と最前線～」のご講演をいただき、多数の参加者に聴講いただきました。また2日目は、ワークショップⅠ～Ⅳを開催いたしました。ワークショップⅠ～Ⅲは、放射線に基礎に関する内容の演習で、アンケートでは、「放射線の基礎を学ぶことができた」との感想をいただきました。ワークショップⅣでは、ホールボディカウンターの測定体験を、国立研究開発法人日本原子力研究開発機構 核燃料サイクル工学研究所に企画していただき、参加者からは「参加型のワークショップで良かった」とのご意見をいただきました。併せて、他の演題発表との重なりがあり参加できなかったとのご意見もいただき、プログラムを作成する際の課題と考えております。また、特別企画は「放射線看護分野の専門看護師に求められるもの」、交流集会は「放射線看護分野における看護職の活動と将来展望」「放射線看護！今後どうあるべきか～様々な立場から語り合う～」の2題が話し合われました。

さらに、企業のご協力を得て、ランチョンセミナーを1日目2題、2日目に2題、計4題を開催、参加者の皆様からは好評でした。企業展示では、放射線測定機器の展示と体験をすることができるなど、放射線を身近に感じながら学ぶことができたのではと思っております。

第5回の学術集会では、草間会長のもと、10名の企画委員で前年度より企画や広報活動を行ってまいりました。また、当日の運営では、東京医療保健大学の教職員や学部生、院生の方々、また外部からは放射線医学総合研究所病院の方々をはじめ、がん放射線療法認定看護師の方々など、たくさんの方々にご協力をいただき、無事に2日間を終えることができました。紙面上ではございですが、ご協力をいただきました皆様に感謝申し上げます。

なお、学術集会のアンケートにはさまざまなご意見をいただきました。今後の学術集会の参考にさせていただきたいと考えております。また、第5回学術集会の内容の一部を、学会誌に報告させていただく予定でおります。そちらもぜひご一読いただければと思います。

企画委員会一同

○第6回学術集会のご案内

第6回学術集会の開催について

学会 HP <http://rnsj6.umin.jp/>

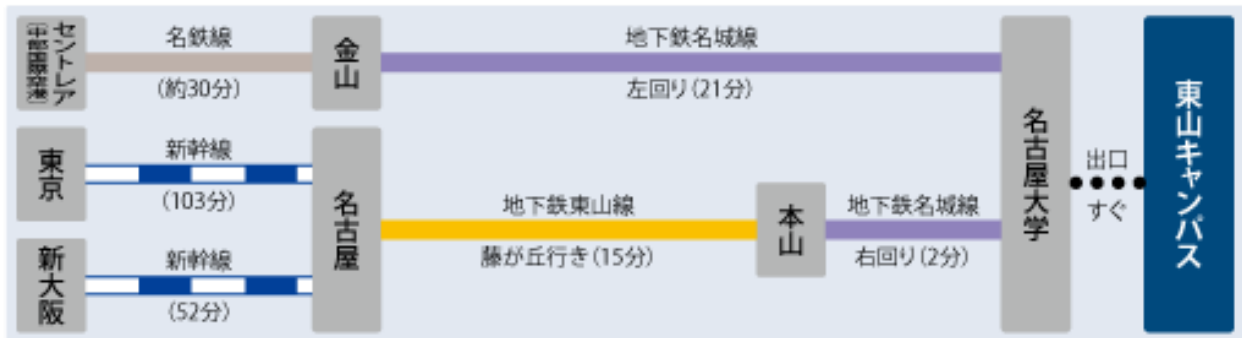
平成29年度の第6回日本放射線看護学会学術集会を下記の要領で開催します。

演題（口述、ポスター）および、交流集会の募集は、平成29年4月を予定しています。

皆様の日頃の活動成果、そして貴重な研究成果を是非、発表して下さい。

また、放射線の医療利用に伴う最新の情報、放射線防護についての基本的な情報について、シンポジウムや教育講演を通じて提供させていただきます。奮っての参加をお待ちしております。

- 1) 大会長 太田勝正（名古屋大学大学院医学系研究科・教授）
- 2) 会期 平成29年9月2日（土曜）、3日（日曜）
- 3) 会場 名古屋大学豊田講堂
 - ・所在地：名古屋市千種区不老町 東山キャンパス
 - ・交通アクセス：地下鉄名城線「名古屋大学」下車、徒歩5分



http://www.nagoya-u.ac.jp/2012website/global-info/images/access-map/route_higashiyama.png

- 4) テーマ：「放射線看護が拓く未来」
- 5) 主なプログラム（仮）
 - ・基調講演：「放射線看護の過去と未来」
 - ・シンポジウム：「放射線診療における看護と原子力災害に取り組む看護」
 - ・教育講演1：「がん放射線看護の未来」
 - ・教育講演2：「放射線診療における被ばく低減の取り組み」
 - ・ランチョンセミナー
 - ・その他、準備中の企画として：IVR 看護研究会協賛の特別企画、日本放射線技術学会および日本保健物理学会協賛のパネルディスカッション

以上

5. 活動報告

○学術推進委員会

第5回日本放射線看護学会学術集会

交流集会1「放射線看護分野における看護職の活動と将来展望」

平成28年9月4日（日）14:00~14:50（第1会場）

学術推進委員会では、第5回学術集会（平成28年9月4日）にて、「放射線看護分野における看護職の活動と将来展望」を共有する交流集会を開催しました。本学会の立ち上げの核となり、放射線看護の学際的基盤を培ってこられた、長崎大学、鹿児島大学、弘前大学の三大学がこれまで輩出してきた修了生3名を迎え、放射線看護専門看護師（仮）の将来展望について、参加者と意見交換を行いました。



会場には、100名程の方々にお集まりいただき、放射線看護専門看護師のこと、放射線看護の未来のこと、本学会の役割など、この分野の発展を熱く語り合いました。

長崎大学の修了生である吉田浩二さん（長崎大学医歯薬学総合研究科保健学専攻）からは、大学院での放射線に関する専門的な学びをもとに、福島第一原子力発電所事故直後の緊急被ばく医療支援チームのメンバーに志願し、線量計を手に自衛隊のヘリコプターで現場へ出動した経験と、現在も福島県立医科大学で続けている住民や医療職を対象とした教育活動についてお話いただきました。住民や、住民の生活を支える保健師には、どのような不安があるか、どのような知識を必要としているか、時間の経過とともに変化するニーズを問いながら、現地で活動を続ける姿が印象的でした。長崎大学では、知識を実践に活用する、その時の状況に合わせ、その場やその地域に必要とされる応用実践を作り出す能力と手腕を育成していることがわかりました。今後のチャレンジとして、三大学の卒業生が協働し、放射線看護専門看護師（仮）の教育を牽引していきたい、研究・教育を含め放射線看護学を構築したい、と力強く決意を述べていただきました。

鹿児島大学の修了生である武田沙江加さん（環境省総合環境政策局環境保健部放射線健康管理担当参事官室）からは、環境省で行っている業務をもとに、行政での看護師の活動についてお話をいただきました。環境省には現在2人の鹿児島大学の修了生が在籍し、放射線に関する冊子の取りまとめやポータルサイトの運営、福島県と近隣県の保健師等の教育、住民の不安軽減（セミナー・車座集会などの開催）、リスクコミュニケーションの促進・支援（現地の拠点の支援）などを担当する部署で活躍されていることがわかりました。看護の視点で、自治体のニーズ把握とそれに応じたセミナーを北海道から沖縄まで行いながら、関係省庁等との調整や、国会に関連した業務も担っているとのことでした。さらに、原子力災害対応として、オフサイトセンター（緊急事態応急対策拠点施設、OFC）に派遣されるバックアップ要員として登録され、全国各地の避難訓練にも参加するなど、多忙な中でも、国家レベルの政策を担う行政の使命感を語る姿が印象的でした。

弘前大学の修了生である堤弥生さん（国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構放射線医学総合研究所病院）からは、現在所属している放射線医学総合研究所病院（千葉県）での活動とともに、被ばく医療における看護の役割について、具体的にお話しいただきました。福島第一原子力発電所事故直後は、千葉県から OFC へ向かい、主に OFC の医療班のメンバーとして、住民対応にあった経験も、現在の活動に活かされていることもわかりました。OFC での看護師の役割は、被災者の心身のケア、安定ヨウ素剤の配布・投与、除染剤の管理、スタッフの健康管理、DMAT への情報提供など、多岐にわたり、そのための専門的な知識や技術、調整力などが求められるとのことでした。この時の経験から、教育の大切さを学び、クリニカルナースの研修にも積極的にかかわり、クリニカルラダーの作成、教育の継続性の検討、被ばく医療コースの研修や訓練の充実などに力を入れていると語る姿に、看護としてぶれない芯の強さと頼もしさを感じました。

会場からは「放射線科看護の“看護”はどこにあるのか」との質問があり、発表者から、「行政では物理的側面から捉えがちであるが、そこには人の生活があることを常に意識し、住民や職員の方々と対話を大切にしている」、「人間から発信される微細なメッセージも見落とさず、時間とともに変化するニーズを周囲の関係者に伝えることは看護師にしかできない」と、放射線の知識、看護学の知識と看護職としての経験から、住民の個人に寄り添い、地域に密着した活動を続けたいとの明確な回答がありました。大学院におけるコースの位置づけやカリキュラムに関する質問もあり、放射線看護専門看護師に対する期待が高まっていることを確認できました。

意見交換を通して、放射線看護学は看護学の主要な一分野として、科学と実践をつなぐ第一歩を確実に踏み出していることを確認することができました。また、放射線看護の先導者である発表者の3名と、大学院生、研究者、実践者とのネットワークづくりも活発に行われました。最後に、座長の弘前大学の野戸結花先生から、「放射線看護を担う人材の資格や立場は多様である、その多様性こそが放射線看護学の発展の原動力になる」とのまとめがありました。この交流集会を機に、人材のすそ野が広がり、関係者や大学間の連携も一層拡充することを期待したいと思います。

（学術推進委員会 大森純子）

【編集後記】

秋の気配を感じたと思ったら、思いがけない寒さの到来であつたり、全国それぞれに冬支度がすすんでいるこの頃かと思えます。今年も残り少なくなりましたが、皆様のご協力により、第2号のニュースレターを発刊することができました。

ニュースレターに関するご意見・ご感想は《学会事務局メールアドレス》までお寄せください。

広報・渉外委員会（委員 太田 勝正、桜井 礼子、小山 珠美）